

* 𐰚𐰇-𐰆𐰃-などハイフンでつながれた2つの原字は左右に配されていることをしめす。

以上は契丹小字文である。この契丹小字文に対応する漢語訳の末尾にも小さなサイズの漢字の一文がある。以下に示す。これが上記の小さなサイズの契丹小字を漢語に翻訳した部分であることは一目で瞭然となっている。

尚書職方郎中黄應期／【改行】

【 空き 】 宥州刺史王圭从行奉【空き】 命題

* 意味は“尚書職方郎中の黄應期と宥州刺史の王圭が従行し命を奉じて題す”となる。

さてここで、先に挙げた小さなサイズで書かれた契丹小字の一文を丹念にみると、**𐰚𐰇**・**𐰚𐰇**・**𐰚𐰇**・**𐰚𐰇**・**𐰚𐰇**という繋がりが次のように2箇所に出てくることがわかる。
𐰚𐰇-𐰆𐰃-𐰇𐰏-𐰏𐰍-𐰚𐰇-𐰚𐰇-𐰚𐰇-𐰚𐰇【1字空き】**𐰚𐰇-𐰚𐰇**【2字空き】
𐰚𐰇-𐰚𐰇-𐰚𐰇-𐰚𐰇-𐰚𐰇-𐰚𐰇-𐰚𐰇-𐰚𐰇-𐰚𐰇-𐰚𐰇-𐰚𐰇【半字空き】**𐰚𐰇-𐰚𐰇**【1字空き】**𐰚𐰇**
この2箇所重複して現れる**𐰚𐰇-𐰚𐰇**・**𐰚𐰇**が漢語訳の何に相当するかということが問題となる。漢語訳をみると“从行奉命題 従行し命を奉じて題す”は“黄應期”と“王圭”の2人にかかっている。そうであるならば、**𐰚𐰇-𐰚𐰇**・**𐰚𐰇**は漢語訳の“从行奉命題”に相当するはずであり、それ以外の下線部分の_____と_____は職名と人名よりなる「尚書職方郎中(以上職名)黄應期(以上人名)」と「宥州刺史(以上職名)王圭(以上人名)」に相当すると推測をすることができる。もっとも2つの職名・人名の漢語訳のいずれが契丹小字文のいずれに相当するかということについては、更なる検討の後に判明する。

以上の基本的な推測については、清格爾泰・劉鳳翥他(1985)に明示されていないけれども、このような事実は誰の目からも明らかであり、同書で行われた原字の音の推定作業の前提となっているはずである。次に清格爾泰・劉鳳翥他(1985)の当該部分を確認する。

3. 清格爾泰・劉鳳翥他(1985)

清格爾泰・劉鳳翥他(1985)には次のようにある。

「郎君行記」の末行の末字は**𐰚𐰇**となっている。「故耶律氏銘文」と「肅仲恭墓誌」の末行の末字もまた**𐰚𐰇**とする。これを「郎君行記」の漢文と結びつけることによって、王静如氏がこの字を訳して“書写”とした見方(『考古』1973年第5期311頁参照)の正しかったことを証することができる。「郎君行記」では、**𐰚𐰇**の前に出てくる一群の文字を**𐰚𐰇-𐰚𐰇-𐰚𐰇-𐰚𐰇-𐰚𐰇-𐰚𐰇-𐰚𐰇-𐰚𐰇**とする。漢文の様式によると、**𐰚𐰇**に隣接した部分は人名のはずであり、「郎君行記」を書いたのは王圭と黄應期の2人である。そうであるならば、この一群の契丹文字のなかで取り上げたのは2人の名であろうかそれとも1人の名であろうか。もしも1人であるとしたならば王圭であろうかそれとも黄應期であろうか。「郎君行記」末行の第5字【ママ】も**𐰚𐰇**であることから、

2人の名は一緒に置いてはないということを見て取ることができる。先に推定したように**主**の音価を *huang* とすること、山路廣明氏が**𡗗-𡗗-𡗗**を宣懿と解釈し併せてそこから析出した**𡗗**の音を *i* とすること（『契丹語の研究』第1輯,1951年油印本）を根拠として**主-𡗗-𡗗**を黄應期の音写であるとしたならば、第1番目の字と最後の字の末尾の音はちょうどまい具合に我々が既に知っている音と符合することになる。漢文中の黄應期の役職は尚書職方郎中であり、【尚書職方郎中という役職名の】第1字目と第4字目と第5字目の韻母は *ang* である。契丹小字の**𡗗-𡗗-𡗗-𡗗-𡗗-𡗗**の第1と第5字の末尾の原字はちょうどまい具合に**𡗗**とする。これで**𡗗-𡗗-𡗗-𡗗-𡗗-𡗗-𡗗-𡗗**を尚書職方郎中黄應期の音写とする可能性は一段と増すのである³。

上に挙げた文章の検討に入る前に二点ほど確認をしておきたいことがある。一点目は上に挙げた文章中の「郎君行記」末行の第5字【**マ**】も**𡗗**であることから「第5字」は誤りで「第11字」とすべきである。清格爾泰・劉鳳翥他(1985)が基づいた契丹文字研究小組(1977)も「第5字」としているだけでなく、その後に契丹文字研究小組(1977)を転載した諸資料も未訂正のままであるので注意が必要である。二点目は、「郎君行記」末行の**主-𡗗-𡗗**を黄應期の音写とするのは早くは山路廣明(1956)に見えるということである。

さて、清格爾泰・劉鳳翥他(1985)は、**主-𡗗-𡗗**の直前の**𡗗-𡗗-𡗗-𡗗-𡗗-𡗗**を役職名の尚書職方郎中の音写として、**𡗗 sh 𡗗 ang-𡗗 sh 𡗗 u-𡗗 zhi-𡗗 fang-𡗗 l 𡗗 ang-𡗗 zh 𡗗 ung-主 huang-𡗗 ing-𡗗 q 𡗗 i**というように原字の音を推定した。**𡗗 sh**と**𡗗 sh**が同音となるなど課題もあるが、この推定は的を射たものであり、あとは遼代の漢語音として修正を加えればよいというものである。これを清格爾泰・劉鳳翥他(1985)は、漢語音を利用した契丹小字の原字音の推定の端緒とした。しかしながら、**𡗗-𡗗-𡗗-𡗗-𡗗-𡗗-𡗗-𡗗**を尚書職方郎中の音写として見定めた経緯については前出の文章によるかぎり明瞭ではない。すなわち、**𡗗-𡗗-𡗗**・・・・・**𡗗**の間にある**𡗗-𡗗-𡗗-𡗗-𡗗-𡗗-𡗗**

³ “《郎君行记》末行末字为「**𡗗**」。《故耶律氏铭石》和《萧仲恭墓志》末行末字亦作「**𡗗**」，结合《郎君行记》的汉文，证明王静如把该字译为「书写」的意见是对的（见《考古》一九七三年第五期，三一—页）。《郎君行记》中「**𡗗**」字上面的一段字为「**𡗗-𡗗-𡗗-𡗗-𡗗-𡗗-𡗗-𡗗**」。据汉文款式，靠近「**𡗗**」字的应为人名。汉字部分说，题写《郎君行记》的为「王圭」和「黄应期」二人。那么这段契丹字里提到的是两个人的名字还是一个人的名字呢？如果是一个人的名字，那么是「王圭」呢，还是「黄应期」呢？从《郎君行记》末行第五字也是「**𡗗**」看，两个人名没有放在一起。根据上面推定的「**主**」字的音值为「*huang*」和山路广明释「**𡗗-𡗗-𡗗**」为「宣懿」，并从中析出的「**𡗗**」的音值「*i*」（见《契丹语之研究》第一辑，一九五一年油印本），倘若「**主-𡗗-𡗗**」为「黄应期」的音译，则第一个字和末一个字的尾音恰好与已知的音值相符。汉文中「黄应期」的官衔为「尚书职方郎中」，第一、四、五字的韵母都是「*ang*」。契丹小字「**𡗗-𡗗-𡗗-𡗗-𡗗-𡗗**」的第一和第五字的字末原字恰好也均作「**𡗗**」。这更增加了「**𡗗-𡗗-𡗗-𡗗-𡗗-𡗗-𡗗**」是「尚书职方郎中黄应期」的音译的可能性。”（58頁）

-子火-主-用-火火のうち、主-用-火火を黄應期の音写としたならば、**𐰚𐰍-𐰚𐰍-𐰚𐰍-𐰚𐰍**の中に役職名の尚書職方郎中があるということになる。ここまでは良い。しかしながら、役職名が漢語を音写したものか或いは契丹語であるか、それとも両者の混合であるか、3つの可能性のいずれであるか分からない。第2番目と第6番目に**𐰚**があるけれども、これだけでは3つの可能性のいずれであるか判断はつかないはずである。漢語を音写したものであるという判断の拠り所は他にあったと私は考える。

4. 漢語役職名の契丹小字による音写

𐰚𐰍-𐰚𐰍-𐰚𐰍-𐰚𐰍-𐰚𐰍-𐰚𐰍の中に役職名の尚書職方郎中があるということになるが、役職名が漢語を音写したものか或いは契丹語であるか、それとも両者の混合であるか、3つの可能性のいずれであるかを、清格爾泰・劉鳳翥他(1985)は何らかの拠り所により見定めたはずであるがそれを明示しない。思うに、その拠り所は**𐰚𐰍-𐰚𐰍**の**𐰚**であろう。**𐰚**の音は小林行雄・山崎忠・長田夏樹(1953)で la とされ、シャフクノフ(1963)で l とされている。**𐰚**が l という音であることを認めるならば、**𐰚𐰍-𐰚𐰍**は郎中の音写であり、**𐰚**は l であり **𐰍**は ang であると推定することができる。次いで、**𐰍**を ang としてよいならば、**𐰚𐰍-𐰚𐰍-𐰚𐰍-𐰚𐰍-𐰚𐰍-𐰚𐰍**の第2番目の文字**𐰚𐰍**を尚書の尚 shang の音写とすることもできる。最後に**𐰚𐰍**であるが、契丹小字の原字は1音節もしくは1子音を表すと想定することができるから、漢語の職方の音写に相当するとしてよい。これで**𐰚𐰍-𐰚𐰍-𐰚𐰍-𐰚𐰍-𐰚𐰍-𐰚𐰍**のうち、第2字目以降の**𐰚𐰍-𐰚𐰍-𐰚𐰍-𐰚𐰍-𐰚𐰍-𐰚𐰍**を漢語の尚書職方郎中の音写としてよいことになる。

5. 結語

清格爾泰・劉鳳翥他(1985)は、①“漢語を音写した例”により契丹原字の音を推定し、②次いで他の“漢語を音写した例”により推定音の是非を検証するとともに、③検証した音を別の“漢語を音写した例”と思われるものに応用する。このようにして、芋づる式に音を解明した原字の数を増やしていくわけであるが、“漢語を音写した例”であるか否かの認定においては、先人の精粗様々な研究成果を利用したことを見て取ることができる。

それとともに、**𐰚𐰍-𐰚𐰍-𐰚𐰍-𐰚𐰍-𐰚𐰍-𐰚𐰍**が尚書職方郎中の音写であるという例により、契丹小字文の中には固有名以外の職名においても、思いのほか広範囲に渡って漢語の音写がなされていることを認識することとなったはずであり、漢語音を利用するという解読方法を徹底して推し進める契機ともなったと想像する。

【参考文献（発行年順）】

金毓黻編録(1934)『遼陵石刻集録』(上冊)奉天圖書館。

山路広明(1943)「契丹大字考」『浮田和民博士記念 史學論文集』(早稲田大学史学会編纂)東

京:六甲書房,313-322 頁。

小林行雄・山崎忠・長田夏樹(1953)「接尾語として用いられた契丹文字の類別表(1)(2)」『慶陵 東モンゴリアにおける遼代帝王陵とその壁畫に關する考古學的調査報告』(上卷本文冊) 田村實造・小林行雄著,京都大學文學部 座右寶刊行会。

山路広明(1956)『契丹製字の研究』東京:アジャ・アフリカ言語研究室。

厲鼎燿(1958)「《漢語拼音方案》幫助了我考釋契丹文字」,『語文知識』第 72 期 1958 年 4 月号,41-42 頁。

中国社会科学院民族研究所・内蒙古大學蒙古語文研究室契丹文字研究小組(1977)「關於契丹小字研究」『内蒙古大學學報』1977 年第 4 期契丹小字研究專号。

長田夏樹(1984)「契丹語解讀方法論序説」『内陸アジア言語の研究 I』神戸市外国語大學,1-49 頁。

清格爾泰・劉鳳翥・陳乃雄・于宝麟・邢復礼(1985)『契丹小字研究』北京:中国社会科学出版社。

吉池孝一(2012)「厲氏 1958 年の契丹小字研究—漢語音を利用した先驅的研究として—」『KOTONOHA』(古代文字資料館)第 120 号,1-5 頁。

* 本稿は平成 25 年-平成 27 年度科学研究費助成事業基盤研究(C)課題番号 25370488 「遼金元清文字資料の研究—電子データ化を中心として—」の助成による成果の一部である。